
流転恐怖傑作選 『てけてけ』

資源?世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流転恐怖傑作選 『てけてけ』

【Nコード】

N9832Y

【作者名】

資源?世

【あらすじ】

作者HPより転載。

とある夕暮れの帰り道。街中で見知らぬ制服を着た少女に声をかけられる。彼女は電柱の影に体の半分ほどを隠しながら尋ねてきた。「足、いりますか……？」と。

メリー「えーと……今日は、キャベツとニンジン、葱、あと……
ピーマンください……」

八百屋「へい！」

買い物用のメモを読み上げると、八百屋は言われたものを次々と買い物袋へと詰めていく。

八百屋「いつもいつも、おつかい偉いねえ」

おばちゃん「ホームステイってだっけ？ 本当、慣れない土地だっ
ていうのに凄じくないの？」

メリー「え？ そ、そうかな？ あはは」

街の人たちには、メリーさん、ソアラ、メルの子は外国からホームステイをしているという扱いになっていた。一般の人たちに都市伝説なんていつても信じてもらえるようなものではないし、受け入れてくれる器があるとも思えないための方便だ。

100%嘘をついているというわけではないが、やはり、心苦しいものがあるのも事実ではあった。

八百屋「今日は特別サービスで少し多めにしてあげようね」

メリー「あ、ありがとうございます！ あ……で、でも……ピーマンはむしろ少なくしてもらえると……嬉しいかな？ なんち

やって……」

八百屋「はっはっは！　さすがに代金分より少なくなしたら、おじさん怒られちゃうから。じゃあ、ピーマンだけはおまけなしにしとこるか」

メル「……色々なものを食べないと……　大きくなれないって、姉様が言ってた……」

メリー「あう……。どうせ、私は身長も胸もちっちゃいよ……」

八百屋「なに、まだまだ大きくなるさ。中学生だもんな？」

おばちゃん「まだまだ育ち盛りじゃない。一番伸びる時期よ」

メリー「……えーと……　私、一応、17歳です……」

申し訳なさそうにぽつりと呟くメリーさんのその一言に、八百屋のおじちゃんとおばちゃんの動きが止まった。

八百屋「……あ……　はっはっは！　な、なに！　まだ成長期は18歳くらいまであるっていうからな！」

おばちゃん「そ、そうよ！　成長期なら1年で10cmや20cmくらい伸びるわよ、ねえ？」

メリー「うう……　人の優しさって……　痛いよ……」

メル「？」

これから始まるのは、そんな切ない秋の日の出来事であった……

・
・
・

メリー「毎日、牛乳飲んでるのに、なんで、どこも成長しないかな……」

メル「……メリーさんは、大きくなりたい？」

メリー「そりゃあ、私も女の子ですから……。もうちょっと身長も伸びて欲しいし……む、胸も……もうちょっとは……」

メル「ちよつと？」

メリー「うっ……ちよつとというか……もっとうつか……。せめて、人並みには！」

メル「……希望を捨てれば、見える明日もある……って、本に書いてあった……」

メリー「あうっ……！　そ、そこはかたく傷つくこと言わないですよ！」

真っ白な服に真っ白い帽子のメリーさんと、それと対照的な黒ずくめの服装のメル。身長他、ある意味、対極的な二人で夕焼けの家路を歩く。一見するとかなり目立つ二人だが、街の人々はいえ、もう見慣れているためか、特に気にした様子もない。

メリー「つて、あー！ いけない、鳥の手羽先買ってなかった！
早く買いに戻らないと……」

メル「手羽先……？」

メリー「鶏さんの……羽の付け根あたりかな？ そのお肉だよ。
それで足はモモ肉。胸の近くがササミ」

メル「羽のあたり……」

メリー「うん。多分、そうだよ」

話しながら、肉屋へ行こうと振り返ったとき……

女学生「あ……あの……すみません……」

電柱に隠れるようにして、一人の少女が、道行く二人を呼び止めた。
このあたりでは見ないセーラー服を着た女の子だ。

メリー「え？ どうかしましたか？」

女学生「あの……えーと……その……」

その子は、ごによごによと口ごもりながら、ばつが悪そうな表情で
こうたずねてきた。

女学生「あ、あの！ あ、足、いりますか？」

メリー「え？ 足？」

その質問には聞き覚えがあった。メリーさん達と同じく都市伝説に名を連ねる者がする質問である。そして、その回答を間違えれば、足を持っていかれる。

メル「……買うのは手羽先…… 手のお肉。足じゃない……」

メリー「あう！ メルちゃん、その人、お肉屋さんじゃない！」

メル「……じゃあ、お魚屋さん？」

メリー「そういう意味じゃなくて……」

女学生「足…… いらないんですか……？ あ、ありがとうございます！」

そう言つて、彼女の表情がぱっと明るいものになる。そして、彼女は人間の胴体すらも切断してしまいそうな巨大なハサミを取り出す。

女学生「では…… 貰いますね？」

メリー「え？！ そ、そんな…… やだ…… な、なんで……？ カシマさんの話読んでないのにカシマさんが来るの？」

女学生「え！？ あ、あの…… じ、ごめんなさい……。わたし、てけてけです……」

そういつて、彼女は電柱から姿を現す。その体には下半身がなく……。

メル「……あれ、ソーセージの原料…… やっぱりお肉屋さん？」

そう言つて、てけてけの体からこぼれる腸を指差す。一度、全員の視線がそこに集中し、すぐにその生々しい光景から目をそらす。

てけてけ「ち、違います！」

メリー「うう…… 私、しばらくソーセージ食べられないかも……」

てけてけ「ソーセージ、ソーセージ言わないでくださいよ！ 私、いつも、これ見てるんですよ？！ …… もうソーセージ食べられなくなるじゃないですか……。と、とにかく……！ あ、足を貰いますよー！」

そういうと、電柱を滑り降り、肘をつかって匍匐前進でじわじわと近づいてくる。

メリー「に、逃げ…… 逃げなきゃ！」

メル「……家に帰る？」

メリー「急いで！」

メルの手を引いて、メリーさんは走り出す。だが、てけてけの最高時速は100〜150kmと言われている。走ったところで逃げ切れるものじゃないのは分かっていた。

メリー「でも、逃げないと怖いもんー！」

メル「？」

てけてけ「え？ そんな、逃げないでくださいよ！ あー…… ちよっ、ま、待ってー！！」

メリー「え？」

どンドンと小さくなる声に恐る恐る振り返れば、既に100m近い差がついていた。

噂とはかけ離れて、そのてけてけのスピードはやたらと遅いものだった。せいぜいが早足で逃げたら、追いつかれるかどうかといったところだろうか。

てけてけ「あー、もう！ 胸がすれるし、引つかかるし、重いし…… いい加減、匍匐前進やめたい……」

メリー「胸……？」

さっきは電柱に隠れていたため、はつきりとは分からなかったが、今のこの状況なら良く分かる。あのてけてけは胸が大きい、つまりは巨乳だ。だが、匍匐前進で進もうとした場合、胸が引っかかって上手く進めないようなのだ。

メリー「……何食べたら、あんな風になれるのかな……？」

メル「……ピーマン？」

メリー「あう…… た、確かに私、ピーマンは残しちゃうけど、違うと思うよ？ ……違うよね？」

自分の胸に手を当てて考え込むメリーさんであつた……

てけてけ「はあっ…… はあっ…… つ、疲れたあ……」

半分ほど距離を縮めたところで、てけてけは道端へ寄りかかつて小休止を始めた。たぶん、この分なら、歩いて帰っても問題ないかもしれない。

メリー「あの…… 私達、帰るから。追ってこないでね？」

てけてけ「ごめんなさい、もうちょっと待って……ください……。はあっ…… はあっ……」

しかし、追いかけてくる相手に待てと言われて待つ人はいない。

メリー「……あの…… ピーマン一っ置いておくので、よかったらどうぞ」

てけてけ「え？ なんでピーマン？！ しかも、なんか凄く憐れみを感じるんですけど？」

・
・
・

メリー「あ…… 手羽先買い忘れた……」

メル「……買ってくる？」

メリー「う…… でも、また、てけてけさんに会ったら怖いし……」。

もう、家は目の前だし、ママさんには私から謝っておくよ」

ふうつと、ため息を一つついてから、家路を歩く。その向かいから見慣れた姿が見える。

ソアラ「あれ？　あなた達、今帰り？」

メリー「うん。ソアラちゃんは、どうしたの？」

ソアラ「ちょっと友達が遊びにくるっていうのに全然来ないから探しにね。まったく、あの子ってば、いつも世話焼かせるんだからぶつぶつと言っではいるが、別に本気で怒ってるわけじゃないのはすぐわかる。素直じゃないだけなのは、よく知っているから。」

メル「ソアラ……　怒ってる？」

メリー「あはは、ちよつと違うかな？」

ソアラ「な、なによ？」

メリー「なんでもないよ」。それより、友達待たせちゃダメだよ？　いってらっしゃい、気をつけてね」

メル「らっしやい……」

ソアラ「『らっしやい』じゃないでしょ！　『いってらっしやい』だからね！　もう……。それじゃ、いってきまーす！」

夕暮れの町をソアラは駆けていった。その後姿をみながら、ふと思

うのだった……

メリー「……ソアラちゃんも、私とあんまり身長変わらないんだよね……」

メル「？」

メリー「やっぱり、食生活なのかな……？」

メル「……でも……ソアラは成長期だから…… 伸びる？」

メリー「あ、あう……！ い、痛いよ、メルちゃん。その一言は……」

メル「？」

・
・
・

メリー「それじゃあ、ママさんが帰って来るまで、お勉強の時間だね？」

メル「……都市伝説の？」

メリー「うん！ 私は都市伝説上級認定試験でキャリア組になって、1ランク上の人形持ったメリーさんになりたいから。メルちゃんは、都市伝説としての生き方と日常生活の基本知識とか、しっかりと身につけて…… お姉さんに心配かけないようにしないとね？」

メル「……うん…… 姉様には…… 笑っていて欲しい……」

二人はそうして、数々のテキストを広げる。そこには様々な都市伝説の問題が書かれていた。

メリー「えーと…… カシマさんの種類を10種類答えよ……。んー……、まずは分かるのから進めようかな？」

あっさりと最初の問題を諦めて、次の問題へと進む。

メリー「首都高最速都市伝説決定戦において、史上最速といわれた今は成仏した首なしライダーの本名と通り名を答えよ……。つ、次……」

問題を読んだだけで、次から次へとページをめくっていくメリーさん。だが、どれもレベルが高すぎて、まともに答えられるものではなかった。さすがに難関と言われる上級認定試験だけのことはある。

メリー「……やっぱり、先輩のいうとおり、初級試験から始めたほうがいいかも……」

あまりのレベルの差を知って、メリーさんは思わず、机に突っ伏してしまう。

???「はあ…… はあ…… や、やっとついた……」

メリー「ん？」

不意に聞こえてきた、その声に後ろを振り向くと……

てけてけ「あ…… ピーマンの人……」

そこには、いつの間に家に上がり込んでいたのか、てけてけの姿があった。

メリー「え？ あ、あ…… て、てけてけさん!？」

メル「……てってけてーさん？」

てけてけ「てってけてーじゃないですよ!! てけてけです!!」

メル「……ソーセージの……人？」

てけてけ「う……。ごめんなさい、その呼び方やめてください……」

メリー「な、なんで……？ ま、まさか、ピーマンを返しにきたの？ あれはあげたものだから、気にしないでいいですから!!」

てけてけ「え？ ち、違いますよ!!」

メル「……手羽先買ってきた？」

てけてけ「なんで、私が手羽先買ってくるんですか?!」

メル「じゃあ…… モモ肉？」

てけてけ「いい加減、肉屋の発想から離れてください!!」

メリー「えと、えと…… カシマの力はカップゼリーの力! カシマのシはシュークリームのシ! カシマのマはマンゴープリンのマ

「!!」

てけてけ「だから、私、カシマさんじゃなくて、てけてけです!!
あと、全部、間違ってますから!! その呪文じゃ、おいしそう
じゃないですか!!」

メリー「あう…… ちょっと待って…… 今、先輩にてけてけさ
んを追い返す呪文を教わるから……」

てけてけ「え、えーと…… 追い返されると困ります」

メリー「えーと…… 先輩の電話番号は…… えーと!!」

メル「1、1、0?」

メリー「1、1……」

てけてけ「あ、あの、それ違います!! 違う人きますよ!!」

メリー「うう…… ひつく…… こ、怖くないもん…… 私だって
都市伝説のメリーさんだもん! 警察に頼らないで、てけてけさん
を撃退できるもん!!」

てけてけ「って、先輩に電話かけるんじゃないかなかったですか!?
本気で警察に電話するつもりだったんですか!？」

メル「メリーさん…… 落ち着いて……」

そう言って、パニックにおちいるメリーさんを抱きしめるメル。そ
のやさしい抱擁に安堵したのか、メリーさんは落ち着きを取り戻す。

メリー「メルちゃん…… んっ…… あ、ありがと……」

メル「…… 大丈夫だから……」

てけてけ「えと…… いいですか？」

メリー「あう…… まだ、いた……」

てけてけ「あの…… ごめんなさい、まだいました……。あ、でも…… 私は別にお二人の足をとりにきたわけじゃなくて……」

と、てけてけの話を遮るように、ピーポー！ ピーポー！ 近くに救急車のサイレンが鳴り響いた。

メル「もう…… 呼んだから……」

メリー「え？」

救急隊員A「重態の人がいるというのは、ここですか！？」

てけてけ「え？」

わけのわからないといったメリーさんとてけてけを差し置いて、やってきたのは、救急隊員であった。彼らは、すぐにてけてけに目をやると、驚きの声を漏らしながらも、すぐにてけてけを担架に乗せる。

てけてけ「え？ あ、あの……？」

救急隊員A「なんて、むごいんだ……。体の半分を失うなんて……。でも、大丈夫！ 君は必ず助けるから！！」

てけてけ「……え？」

救急隊員B「急げ！ これだけの重体だと、時間の勝負だ！」

救急隊員A「ああ！ すぐに近くの病院に手術の準備を！」

てけてけ「え？ あの…… その…… わたし、別に…… えと、ここには友達に会いに来ただけで……」

救急隊員B「あまりしゃべるな！ 傷に響くぞ！」

てけてけ「え？ あ、あの…… ごめんなさい……」

救急隊員たちは、あっという間にてけてけを救急車に乗せると、そのまま、走り去ってしまったのだ……

メル「怪我人をみたら、119…… 救急車を呼ぶ……」

メリー「……あう…… あれは怪我…… だけど、怪我じゃないというか……。まあ、助かったから、いいのかな？」

その頃

ソアラ「まったく、どこにいるのかしら？」

そう呟きながら、夕暮れの町を一人歩く。

その後ろでは、救急車がけたたましくサイレンを鳴らしながら、ソアラの後ろを駆けていく。

てけてけ「だから、私はけが人じゃないんです!」

救急隊員A「落ち着け! もうすぐ病院だ!」

などという中の騒ぎは聞こえることもなく……

ソアラ「……てけてけてば、気が弱いからなあ。変な人につかま
ってなきゃいいけど……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9832y/>

流転恐怖傑作選 『てけてけ』

2011年11月29日19時50分発行